



小児がんセンターたより

小児病院の良いところ、悪いところ（後編）

小児病院の抱える問題点として、前回は成人移行のこと、特に外科では臓器特化した専門家がないこと、を挙げました。

さて、今度は長所です。

やはり何といたっても「こどもための病院」であることです。院内のすべてがこどものために作られ、職員がこどものために働いています。例を挙げればきりがありませんが、年齢層別の病棟、きめ細かなこども用食事メニュー、廊下や手術室等の壁面イラスト、相談部門の充実など一般病院では見られないものばかりです。演奏会などのイベントも当然ながらこどもが主役です。

次に、こどもを診療する医療者の層の厚さも特筆に値します。大学病院などであれば「小児科」として一括りにされるところを、当院では「血液・腫瘍科」「内分泌代謝科」「感染免疫科」等々、それぞれの小児専門家集団がいます。どの診療科も国内外で名の通った専門医が活躍しています。外科系も、「整形外科」「泌尿器科」「眼科」等、それぞれの診療科の中でも小児を専門とする医師が常勤しています。麻酔科、放射線科、病理診断科なども小児専門の医師が活躍しています。「栄養管理課」「放射線技術科」「臨床心理科」などの部門も、常日頃から小児の医療技術を学び、研鑽しています。

私は2000年に当院に赴任しました。当時は創立当初からの古い建物でしたが、それまで北海道の一般病院・大学病院での勤務経験しかなかった私の眼には、こどもの診療科だけで24科もあることに度肝を抜かれました。そして診療科がたくさんあるのに各科の垣根が低く、他の専門家にすぐに相談できることにも驚きました。当院の良き伝統であり、時代が変わっても受け継がれていくものと思います。

小児がんセンター長 北河 徳彦

地域とつながる緩和ケアを目指して

令和4年10月27日に、当院の「緩和ケア普及室」「退院・在宅医療支援室」「小児がん相談支援室」共催にて、「小児在宅ケア・連携カンファレンス」を開催しました。テーマは「在宅緩和ケア」です。

小児がんのこどもたちは、抗がん剤などの治療を受けながら、ずっと入院ではなく、学校に通ったり、「その子らしい生活」を送るため、訪問看護ステーションや訪問診療医の先生の力を借りて、「住み慣れた地域で過ごす」ことを目標に、地域とつながるお手伝いをする必要があります。それはまさに「緩和ケア」であり、必ずしも「終末期」の意味だけではないと考えています。

会の中では、地域の訪問診療医の先生の立場から、こどもの在宅医療についての現状と課題などをお話しいただき、院外の方々とはオンラインでつながり、活発な意見交換がなされました。

小児がん相談支援室は、「緩和ケアチーム」の一員でもあります。今後も地域の方々ともっとつながりながら、子どもたちがよりよい生活を送れるように支援していきたいと思っています。

「小児がんセンターより研修会などのお知らせ」

●2022年度神奈川県小児がん従事者研修

12月20日（火）小児がんにおける薬剤師の関わり

小児がんのリハビリテーション

1月17日（火）小児がんの学習支援（相談員・教員の立場から）

2月21日（火）グリーフケア

18:00~19:00

Web参加可能

●小児がん相談支援室セミナー

2023年1月14日（土） 14:00~15:00 「高校生の教育支援」web開催

●国際小児がんデー啓発イベント（オンライン）

2023年2月15日（水）～特設サイトOPEN予定 その他イベント企画中！

※詳しくは、各施設に配布の案内・当院HPをご確認ください



小児がん相談支援室 情報コーナー



～小児がん拠点病院の整備に対する新しい指針について～

令和4年8月1日に、厚生労働省の方から出されている「小児がん拠点病院の整備に対する指針」が内容を更新した新しいものとなり発出されました。その中では、成人のがん診療連携拠点病院や小児がん連携病院との連携をしていくこと、「AYA世代」の支援を強化していくこと、病院内だけでなく、地域も含めた病院外の多職種の方々と連携して支援を行うこと、きょうだいを含めた家族の支援を行うことなど新しく追加されています。

特に「AYA世代」に関しては、脱毛や身長など見た目の問題「アピアランスケア」、こどもを授かる事に関連した「生殖医療」、晩期合併症のフォローや社会的な問題を支援する「長期フォローアップ」などはとても関わりが深く、こうした小児がん経験者たちがその人らしく社会生活を過ごしていくためには、医療従事者だけでなく、周りを支える地域や行政、一般の方々に小児がんを知ってもらう事がとても大切だと思っています。

今年度も2月の国際小児がんデーに合わせて小児がん啓発イベントをオンラインにて企画中です。是非、のぞいてみてください。(2023年2月15日～予定)



【厚生労働省ホームページ】
がん診療連携拠点病院等
関係通知・資料
○小児がん拠点病院等の整備について

小児がんに関連したご相談は
「小児がん相談支援室」(本館1階7番窓口)までご連絡ください
時間：平日(月～金)8:30～17:15
相談方法：面談・電話・メール
電話:045-711-2351(代) E-mail:shounigan@kcmc.jp

各部門からのお知らせ

～臨床心理科～

こども医療センター臨床心理科は、9名（常勤7名、非常勤2名）で業務に当たっています。外来では、主に全診療科から依頼される発達検査や知能検査を実施し、ご家族と結果を共有しながらその後の支援について一緒に考えています。また、いくつかの病棟は担当の心理士がおり、定期的に訪問を行っています。

小児がんの患者様とのかかわりは、主にクリーン病棟入院中の患者様とご家族が中心です。主治医からの依頼によっては、クリーン以外の病棟へ訪問することもあります。クリーン病棟には毎週木曜日の午後に訪問し、ベッドサイドを回ってお話しさせていただいています。お話しする相手は、患者様ご本人のこともあれば、ご家族のこともあります。思春期以降の患者様の場合には、ご本人の希望に合わせて別の日に訪問したり、ご家族がお子様の前で話しにくい場合には、お子様とは別の場所でお話をうかがうこともあります。

思いがけない診断や突如始まる入院生活は、お子様、ご家族、どちらにとってもストレスが大きく、慣れない病院での生活に気持ちが疲れてしまう方も多いかと思えます。心理士と話す、というと何か相談しなくてはいけないように思われる方もいらっしゃるかと思えますが、毎日の生活の中でふと思ったことなど、特別な話題はいりません。患者様のことだけでなく、ごきょうだいのことでも大丈夫です。大人も子どもも、前向きでいられる日もあれば、気持ちが沈んで誰かに気持ちを聞いてほしい、と思う日もあるかと思えます。

誰かと話すことで少しでも気分転換や息抜きになればと思っています。



臨床心理科 後藤恵